

編集の視点で地域の魅力を発信
「エディット KAGAMIGAWA」第2回講座・現地フィールドワーク



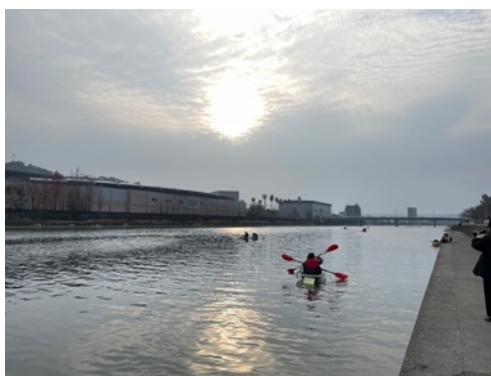
1月6日(金)から8日(日)の3日間、高知市・鏡川流域にて「エディット KAGAMIGAWA」第2回講座の現地フィールドワークを実施しました。

講座修了生を含む21名が参加。五台山展望台からの鏡川流域一望からスタートし、鏡文化ステーション RIO やオーベルジュ土佐山、久重地区を訪問、最終日は土佐の日曜市見学からのまちなか散策と、通常の観光では出会えない鏡川流域の魅力を堪能しました。姉妹講座「高知・鏡川 RYOMA 流域学校」に続き、ツアープログラムは第1期生の岡林雅士さんによるコーディネートです。



五台山展望台から鏡川流域の全体像が把握できたところで、宗安寺地区へ。多国籍料理店 SO-AN では、店主・公文潔さんの他、1期生の高田佳乃さんや常連客の皆さんがお出迎え。宗安寺きのこセンターでは、しいたけの炭火焼きやなめこ汁、なめこのかき揚げを実食し、大ぶりで肉厚のきのこに参加者は大感激。鏡川流域の暮らしや特産品への思いをじっくりと聞くことができました。

その後は鏡川みどりの広場に向かいます。ここでは、クリアカヤック・パックラフト体験を実施。パドルさばきに苦戦しながらも岸を離れ、水面を覗いてみると川底が見えることに驚く参加者一同。第1期生であり今回ガイドを務める大下宗亮さんから鏡川の水質や生態系についてレクチャー。都市河川でありながら、豊かな生態系がある鏡川の特徴を知ることができた1日でした。





2日目のスタートは、夢産地パーク交流館かわせみにて夢産地とさやま開発公社・理事の大崎一さんと土佐山アカデミー・事務局長の吉富慎作さんに話を伺いました。吉富さんから土佐山100年構想におけるそれぞれの団体の位置づけや吉富さんの取り組み、大崎さんからは有機農法への思いを聞き、土佐山地区の地域づくりについて知ることができました。

夢産地パーク交流館かわせみを後にして、桑尾沈下橋近くの古民家オーナーで第1期生の林明保さんを訪問。「まずは何もせず自然を感じて欲しい」という林さんの言葉を受けて、沈下橋で川のせせらぎに耳を傾けます。川遊びが好きでUターンして鏡川流域に移住したという第1期生の永野正和さんからアウトドア視点での鏡川の魅力を伺い、流域との関わり方をイメージしていきます。



久重地区の久礼野茶房でランチを食べた後、オーベルジュ土佐山へ。中川をよくする会の会長・前田尺成さんからオーベルジュ土佐山設立の背景を伺い、自治の精神が根付いていることに驚かされました。「冬は寒くて川遊びなんて」といういちご生産者の門田章広さんは、「最近アウトドアサウナも」という参加者の言葉に感心するなど、地元の方も外からの視点に刺激を受けたようです。

鏡文化ステーション RIO では、JA 高知市女性部鏡支部・支部長の鎌倉京子さんを訪問。鎌倉さんのかがみ音頭の歌唱に始まり、イタドリの塩漬けやほけきょ漬けなどの商品化や海外展開に関するエピソードを伺いました。毎年1商品、新商品の開発を目指しているそうで、今後の展開が楽しみです。2日間で、青山ファーマーズマーケットに出店する際のヒントを得ることができました。





最終日である3日目は、土佐の日曜市見学からスタート。マップを見ながら歩きますが、出店数の多さと広さに驚かされます。その後、メイン講師の『ソトコト』指出一正編集長、第1期生の比留間優子さん、大下さんがそれぞれガイドを務めるまちなか散策を実施。3班に分かれ、暮らしや歴史、おしゃれスポットなどそれぞれの視点から市街地を探索しました。

それぞれの班で昼食を終えるとオーテピア高知図書館の集会室で3日間を振り返るワークショップを実施。模造紙に青ペンで鏡川の形である「C」の字を書き込み、それぞれの参加者が印象に残ったことを付箋で書き込んでいきます。

その後、雑誌のリード文と同じ文量である140文字でまとめるワークを行い、それぞれが感じた鏡川流域の魅力を共有しました。



初めての高知という受講生も多く、現地フィールドワークの体験ひとつひとつが鏡川流域の「関わりしろ」として魅力的なものに写ったようです。終了後アンケートでは「人とのつながりが密接している川という意味が分かった」「魅力が実感でき、周りにも伝えていきたい」「中の人としても関われる方法を今後も模索して行動に移していきたい」という意見があり、「桑尾沈下橋で読書会を開催したい」など、具体的な取り組みへ意気込む受講生もいました。



次回は1月24日(火)、今回の現地フィールドワークを通じて鏡川流域の魅力を発信する青山ファーマーズマーケット出店準備を第3回講座の中で行っていきます。